Government officials were sent to inspect and purchase horses in Edo-era. Morioka-Han and Sendai-Han were famous for breeding horses. Through the examination of historical materials, following results are ascertained;

1. Officials sent by central government to Morioka-Han used Okari-ya of Morioka-Han as a lodging.
2. Officials sent by Morioka-Han to Tono used Okari-ya of Tono as a lodging.
3. We suppose that officials sent by central government to Sendai-Han used Gaijin-ya and Baken-sho of Sendai-Han.
4. Baken-sho of Sendai-Han was suitable for inspecting horses on front road.

Keywords: Okari-ya, Gaijin-ya, Baken-sho, Morioka-Han, Sendai-Han
御仮屋、外人屋、馬見所、盛岡藩、仙台藩

1. はじめに
仙台藩においては、他藩大名、幕吏等の外人屋を外人と呼び、こうした人々の休泊の施設として外人屋が設けられた。その内の仙台城の外人屋について、平面構成、利用状況等の変遷を明らかにし、他藩の例と比較しながらその歴史的価値を検討した。また、仙台藩内に藩主やその一族が休泊に利用する施設として御仮屋が設けられ、すでに若干の例を検討した。盛岡藩においては御仮屋の存在は認められるが外人屋の名称は用いられず、仙台藩における外人屋を含めて御仮屋と称していた。

一方、幕末期において、馬は産業上、軍事上重要な資源であり、日本各地で馬産がなされた。中でも東北地方は主要な馬産地であり、盛岡藩、仙台藩、秋田藩、相馬中村藩等では馬市が設けていた。また、幕府も東北諸藩に馬買衆（公卿馬買衆、御馬買とも呼ばれ）を派遣して馬を調達した。さらに、幕府による馬買制度を模倣し、藩政が休止する制度を設けて、御仮屋御役人を領内に派遣して馬を調達していた。

しかし、馬買衆、御仮屋御役人が滞在、宿泊に利用した施設についての研究は、上記の外人屋、御仮屋が利用されたか否かの解明を含めて、未だ行われていない。また、仙台城下には馬見所と呼ばれる施設も見られるが、馬の調達が実際に行われた建物や場所、さらには、これらと町の構成や景観との関連についての検討もなされていない。本稿では、まず盛岡藩を対象に馬買衆と帯馬、盛岡の施設について、次に、御仮屋御役人と遠野の施設について、そして、仙台藩を対象に馬買衆と仙台、川崎の施設について、上記の点から検討したい。こうした検討を加えることにより、従来から進められてきた大名、巡見役等の利用に着目した研究をより総合的なものとすることが可能となる。

2. 馬買衆、御仮屋御役人、盛岡藩、仙台藩の概要
幕府が東北諸藩に毎年馬買衆派遣をするようになった時期については、寛永7年（1630）もしくは寛永12年（1635）とする説がある。盛岡藩の編年体の史料である『南部藩家老席目録』 （文献1.以後『日誌』と略称）に、寛永の最初の年である寛永21年（1644）以降元禄3年（1690）まで毎年馬買衆派遣の記載が見られるので、遅くとも寛永末期には馬買衆派遣は定着していたと考えられる。元禄4年（1691）には老中から盛岡、仙台両藩の江戸留守役に「当年より東北地方御馬買御御下不被除後遂、内御役人申付御馬買時分之通御馬使御御下被除被日程農業」（『日誌』同月4月2日目）とあり、馬買衆の派遣が廃止され、両藩が調達して江戸に送る方法に変更されたことが知られる。このことは『日誌』にお
「石下藩派遺」の記事が元禄3年を最後に見られなくなること、および、「『石下讃岐日記』の元禄4年の記事（文献14、p.33）に「この時御仮屋敷流下不適成候」とあることと符合する。

馬賀衆は通常2名で、9月から11月にかけて、江戸から奥州街道を下りて仙台藩に、筑前街道を通って山形藩に抜ける。更に渡って下った後、秋田街道を通って盛岡郡に入り、奥州街道を渡し仙台藩を通して江戸に戻るという慣例（図1）。

天保3年（1683）の例では馬賀衆1名に付き一行は35名前後であった（『日記』同月10日17条）。

盛岡藩では、盛岡の南部市域居の他、花巻を治めて藩内5個所に要番屋敷があり**注4**、それぞれを中心として小城下町に形成されていった。遠野には要番屋敷があり、これを拠点として大戸弥六郎、高知が呼ばれる関門的な重臣30家の筆頭で、1万2千石余の知行高であった。一方、これと併行して、藩内を32の通りに分け、各通りの集落を代官所を置いて支配していた。箇所には32通の一つである箇所を管理する代官所が置かれ、馬賀衆の経路でもあった秋田街道上に位置していた（図1）。

従って、『日記』には毎年のように記事が見られ、いずれの年も7月に「所営運捕申付状」（元禄5年7月16日）、「在所運捕擬付状」（元禄10年7月28日）等と題して、遠野、陸伊、鹿角等の藩内各地域から派遣される役人の名前が記されている**注5**。後に述べるように「遠野御仮宿」に「盛岡より毎年従騎御役人御出御の時は」等を考え併せると、定例化されていた様子がうかがえる。

仙台藩の出来事を関年体で記録した『伊達治家記録』（文献2、以後『治家記録』と略称）にも、藩内を馬賀衆が通過する記事が見られるが、『日記』には馬賀衆が派遣されていた期間は毎年記事が見られ、しかも上記の通りのように詳細に記されているのに対し、『治家記録』では馬賀衆派遣の記事が見られない年があり、馬賀衆に関する内容も『日記』にて極めて簡略である。

仙台藩では御門、御一家、準御家、御一族、うち、守御、大牢上、召出等の形式を持ち、門前の有力家臣に居城と居殿を与え、居殿を中心とした小城下町とその周辺地域を一円に支配する体系を採っていた。これら家臣は居城の、要番、所と称する番所**注6**と、仙台城下の屋敷を共に持っていた。中村登の上川川は、馬賀衆が派遣されていた元禄末期まで砂金寺（大正5年、1565年）を要番を拠点とする在城小城下町であり、馬賀衆の経路でもあった篠谷街道上に位置していた（図1）。

3. 馬賀衆と盛岡車卸石の御仮屋

車卸の現状略図を図2に示した。現在も旧秋田街道の両側で街並が形成され、車卸代官所が設けられた場所が利用している**注7**。

寛永21年（1644）には秋山弥左衛門、黒沢木工の馬賀衆2名が秋田藩の生保内（図1）から車卸に来て宿泊した。この時「御駕走」のため名前藩士が派遣されていた**注8**。天和元年（1681）11月19日には車卸で火災があり、この様子が『日記』同月11年20日通りに、「車卸御従次郎と申す者火元を、作製車問屋に車卸にて火事が出、西方御仮屋右助次郎預車郭侯と仮仮代半分焼失、同作製並に車屋御段武、向東方御仮屋近所小玉郎三九郎ノ式車ノ家数五軒焼逆亡」で記されている。これによれば、この時点で以前にすでに西方御仮屋、東方御仮屋の御仮屋2軒が存在し、西方御仮屋が半焼したことが知られる。また、清次郎、新次、従兵衛、小玉郎、三九郎の5軒が「焼焦」つまり全焼したことになるが、清次郎は西方御仮屋を預かっていたとあり、清次郎、西方御仮屋、従兵衛、馬賀衆は「軒並」つまり街道に面して同一の側にあり、小玉郎、三九郎は街道の向かい側で東西御仮屋の「近所」であったことが理解される。従って、両御仮屋は街道の両側に、比較的接近して建てられていたと推測される。

翌天和2年秋には半焼した西方御仮屋も使用できる状態に復していたことがうかがえる**注9**、翌天和3年については御仮屋を利用したことが記されている**注10**。

一方、馬賀衆の人間が屋敷を廃止した直後の元禄4年（1691）には「先諫御馬賀衆御下御院尼雫、使白御仮屋而御宿之」と題して、「一 下之御仮屋（助）右御仮屋室之場所へ、生内与五右衛門殿長既、先之御仮屋之御座候、但与五右衛門殿之通、道下より助左助方之御仮屋之場所之御座候」で記されている。天和2年に上之御仮屋が火災に遭ったというこの記事は、先述した元禄3年の西方御仮屋が半焼したという『日記』記事と、1年の違いがあるものの、同一のことを示すと考えられるので、上之御仮屋が西方御仮屋に、下之御仮屋が東方御仮屋に該当しよう。

上之御仮屋について、「御前（御前）より」という表現は越後の費用でという意味と考えられ、それまで御仮屋の修繕等が藩の費用で行われてきたことをこの文書で確認して、馬賀衆派遣廃止後も引き続き同様の援助を得ようとしたものと思われる。「（元禄）御仮屋では先家主有之」と同様であることが記されるが、その場所と御仮屋の場所との関係、および、帳書**注11**と作右衛門との関係は明確ではない。しかし、天和元年（1681）の火災の記事に記載、つまり、上之御仮屋を清次郎が預かっていたと記され、両が街道の同
一例に近接して存在していたと推定されたことから、元年家主が清水郷で、信義が作右衛門であり、元禄4年時点では作右衛門が御仮屋の維持管理を担当し、その屋敷が上之御仮屋と街道の同一側に近接していた位置であると説することができる。\(^{23}\)

ここに名前の挙げられている仁助、作右衛門、生内与左衛門の内、作右衛門の名は、この文書が記された元禄4年（1691）の約40年後に当たる享保15年（1730）、（図2）の東顕の戸籍に書き入れられている。従って、「両史料に書かれる作右衛門の屋敷名が同じであるとすれば、街道南側のこの近辺に西方御仮屋があり、道を挟んだ北東側のこれと比較的近い位置に東方御仮屋があったことになる。」^{14\(^*\)}

この道路を定期的に参勤交代に利用する大名は存在しなかったこと、および、馬賃金が派遣されなかった元禄4年（1691）以降は御仮屋についての記録が史料に見出せないことを考え併せると、御仮屋2軒は馬賃金の利用を最初に考慮して設けられていたと考えられる。\(^{24}\)

4. 馬賃と盛岡城下の御仮屋

盛岡城を含む範囲では、盛岡城下の一部を図3左に略図で描いた。盛岡城は本丸、中丸、新丸からなり、北東が大手となる。城の北東側の範囲は画図の左上部分に含まれ、門間の重臣である高知の屋敷が設けられていた。御仮屋は信州方面から右町、六日町、上之橋町を通り、城の外郭に沿って北面している。

現在遺されている盛岡城下御仮屋内、元文年間（1762～1840）の図^{25\(^*\)}では、上京御書院内に六日町と交差する位置に「御仮屋敷地」と書き込まれた2箇所の敷地が描かれて、この部分を探して物見所に位置設定した。寛永の頃ではこの位置に御仮屋は描かれておらず、図3右側に示した2箇所の内、六日町通り北側の敷地を幕末の給付^{26\(^*\)}にも御仮屋と書き込まれている。

天和3年（1683）に宝永御仮屋に寄宿した馬賃金は、翌日「右御両人と今朝卯に刻出し御立願御仮屋敷地を下々上刻御書」と（『日誌』同月10日18条）と記録されている。盛岡城は盛岡に2週間程度滞在し、その間に（「老君壁」、「二番見」、「三番見」等を称する馬賃金を図面に示して馬を調達するのを慣例とした。また、馬賃金が登城して藩主もしくは藩主嫡子に面して、御仮屋敷地に要求が行われるのを慣例とした。天和2年（1682）の例では、「若殿殿（＝嗣子）御馬賃金江為御見覆未下記馬町御仮屋敷地」と同月10日18条とある。これは馬町御仮屋敷地と記され、以下の御仮屋敷地、また、次章に挙げられる東之御仮屋敷地の名称も『日誌』に見られる。

巡見使も御仮屋を利用した。宝永7年（1710）に巡見使3名が派遣され「右御三人稲御仮屋敷地用被成」（『日誌』同月26日条）とある。この時期盛岡藩3名が「六日町御仮屋敷地奉行を首尾よく勤めたことが記されている。」^{27\(^*\)}、また、馬賃金、巡見使が利用した折には盛岡藩から購入人が御仮屋に遣わされた。\(^{28}\)

5. 馬賃、御用馬と盛岡城下の御仮屋

馬賃金による馬賃の様子は「御馬賃金一番見之内八拾御用御備、馬場へ八拾御用六日出ル」（『日誌』天和2年10月17条）等と記されるが、馬賃金派遣後は元禄7年（1710）に公儀御馬賃金

番見御新丸於委御仮屋見分、御馬場へ御用馬松間藤右衛門等」（同、同月9日12条）とあって続けて町奉行等の武状の名前が挙げられ、この年も「三番見」まで行っている。このことは、馬賃金派遣後も馬賃金派遣状等で同様の馬賃が行われていたことを示している。さらに詳細を見ると、元禄2年以前については、ここに挙げた天和2年2月のように「御馬賃金一番見」等と記され「馬賃金が見られ、という内容に理解されるのに対し、元禄4年以降については宝永7年の記述のように「御禮馬賃金番見等」と記され「馬賃金が見られた」という内容に理解される。馬場に出た人物も、元禄3年以前については、喜多筆頭で道端と要件を拝謁していた八戸弘六郎のような、幕府から派遣される馬賃金に対する対応に違い重臣であったのに対し、元禄4年以降については人、町奉行と言った実務的な役員に変化し理解される。

また、上述の宝永7年の例では、実際に馬賃が行われた場所として、「御馬場又は表御仮屋」とある。元禄元年（1691）についても元禄2年2月に示すように「御馬場又表御仮屋番見分等」とあるが、馬賃金番見の例は見当たらない。御仮屋黒松の名称による御仮屋黒松の在所であると考えられる。馬見との一番を含め強場状況であり、場所の北辺には「大黒掛」も描かれ、馬賃金等の行事に適した場所と言えよう。

馬見の後、買い上げた馬について、元禄3年以前に『日誌』に記述が見られない、これに馬賃金の管理の下で盛岡藩は関与したかったことが考えられる。元禄4年以降になると「公儀御家向就候御用馬六日町御仮屋敷地入候」（『日誌』元禄12年11月24条）、「御仮屋番見今日之候御仮屋地相立候」（同27条）とあり、福は御仮屋敷地と馬を管理し、馬が江戸へ向けて盛岡城を出発した後も「御用馬町御仮屋敷地往候」（同、元禄10年11月21条）とあるように、薬の役者が付けていった。\(^{29}\)

享保5年（1720）には「御用馬之候、向候御仮屋用馬と唱可申」と（同、同年9月26日条）あり、享保5年、6年の図に「御用馬（中略）東之御仮屋敷地候」（同、享保6年10月24日条）とあるように御用馬の詰が用いられている。「御用馬」、もしくは、「御仮屋用」と称し幕府用の馬を仮置、調達、移送するように方針は元禄4年以降続いたが、享保6年を最後に『日誌』には見られなくなり、この年を以て廃止されたと考えられる。\(^{30}\)

6. 騎馬御用軍と盛岡藩道野の御仮屋

元禄2年間末期の遠野城下を巡る『遠野城下丁割図』内、要員出陣者から東側の町屋地を示す部分を図4に示した。図中には2箇所の御仮屋が描かれているが、遠野の御仮屋について、嘉隆13年（1763）に書かれた『遠野公事記』（文献3）には「公儀諸国御用巡査使統制殿夜郎は冬に同行、比時より遠野え御仮屋の出、此時の事に従後、一日十町より多大之入の左右に御旅所の御仮屋郡軒が数多く、御用に町屋敷御取士下、屋敷主家は武田戸所の影響の代を御仮屋、此村一軒の御仮屋に一日市町より御家屋有数に爲に花の右衛門と云から御仮屋に上乗せ、此事より御仮屋敷の出の毎度御用可上被候成」
町御妨に成候故

旧所屋敷裏の町屋
仮宿泊に対応し上「敷場」になる臨

御仮屋がある

退野町

御仮屋

町御妨に成候故

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨

町御妨
の間には約80年の空白期間がある。

外人屋は寛文10～18年（1633～41）に最初に建てられたと考えられる。①の目的には当初、外人屋として、大町站と日向御人屋、国分町中野太兵衛方御人屋、国分町相武平右衛門方御人屋、国分町中野太兵衛方御人屋、国分町柿田長右衛門方御人屋の5棟が含まれており、これらは大町外人屋（図5c）、および、国分町（図5b）にあった4棟の外人屋を含んでいる。①の目的にはこれら5棟とは別に「国分町柿田長右衛門方御馬廐所」という項目が見え、目的での記載書は、大町外人屋から徳川家方士屋までの上に示した順であり、その後に柿田長右衛門方御馬廐所があたって、最後に柿田長右衛門方外人屋が挙げられている***。柿田長右衛門方御馬廐所と標記された場所の図は表7に示す図が描かれており、その左側に「右御馬見踏見とは二紀番」と書き込まれている。貞享2年（1685）は図で使用される当時の規模であり、「御立箇」とあることから貞享2年以前にすでに同様の建物が存在していたことが知られる。

図6は桁行12間の建物平面図に「門部」の書き込みがあり、左側の書き込み中に「御馬見」とあるように長屋門の形式であるか否かは模索されず、また、徳川御用とその関係、も別されされていない。門を挟み、図6で右側に12軒の広さの建物、左側に8軒、8軒、10軒の広さの3室が並び、左側の8軒の建物には床に帯が、殿殿、関所が接着し、中央の8軒の建物に直結する8軒の建物には屋、玄関が位置している。図に示され、建物与図記、建物等が書き込まれ、図6にもそれらを示したが、左側3棟、右側の間仕切りはすべて「切妻（切妻）」で開放的であり、その外側にくり銅が設けられ、書き込みより二重の縁に「ひら読み（ひらがな）」「ふたたえ（ふたたえ）」が取り付けられていたことが知られる。

そこで、この段階は国分町にあって建物が長屋門形式であることから、図でこの建物の上側が有州街道に面していたと考えられ、くり銅は街道に面する側に設けられたことを示す。御馬廐所という標記が示唆する機能がこの平面に示されると考えると、建物のある10軒の建物はそれについの2つを基に、くり銅から高欄越しに街道上の馬を見て、さらにに踏み器から街道上に降りることができるよう設計されていたと考えられる。

②には次の如く「国分町外人屋両所御立箇屋（同町元御馬見所）」（下記）という項目があり、外人屋とその後の立箇屋を描写した図で、国分町両立箇屋と題された建物との2枚があり、後者を図7に描いた***。桁行11間の長屋門形式の建物平面図が描かれて、これは「外人屋宿 善川斎兵衛 自分家」と書き込まれた建物の外郭を描かれている。前者は黄色く着色され後者が白紙色されている。『御馬廐所例』に表現される外人屋の例から着色されたものののみが築造者方の従属下にあると考察され、後者は「自分家」と書かれることから、自分方で築造、管理する建物であったと判断される。皆川斎兵衛については不詳であり、また「外人屋宿」であるが、外人屋との具体的な関係も不明である。

図7に描かれる長屋門には、2か所の「二階窓」があり、2階建てである。図6と同様に建物後の書き込み、廊部の有無の街道に面する部分はすべて板張りとされる。また、「懸下」とある部分が街道側全面に位置されているが、これに処の下、あるいは、2階出桁の下を示すと推定され、図6の「長小羽吹け下」とされる部分に共通する。敷地内側に板張、土間を含む部分が突出する形に描かれ、横も描かれていることから、ここは台所に相当しよう。また、図6と図7と同様に障子が描かれている。

③には次の如く「国分町外人屋両所御立箇屋／同町元外人屋」（下記）という項目があり、外人屋と同様に立箇屋として描かれている図にも書かれており、国分町元外人屋を描かれた図が存在し、後者を図8に描いた。両地に「外人屋宿」が描かれ、これらは明らかに国7と同様のものである。外人屋宿は家が着色されていないことも図7に共通するが、他に建物は描かれていない。②でいずれにも方所等の書き込みはなく、国分町のどちら側に位置していたかは不明であり、また、具体的に敷地を特定する史料も見出せない。

以上を基に、まず、①（図6）と②（図7）とを比較すると、長屋門形式の建物である点が共通し、台所部分、床の有無等の点で相違するものの、街道に対して開放的な平面を持って、廊殿を設ける点も共通する。①の建物桁行12間は②の建物桁行11間とその図表（図7で上園）の空き1間を加えたものに等しい。また、①の標記「御馬廐所」、②の標記「元御馬見所」と、名称の点で相違性が認められる（以下、御馬廐所と御馬廐所をまとめて図示と表記する）。従って、図6が描かれていた建物は図2bに描かれる図7に直接同一であるが、図にかかわる期間に図6から図7へと建物 cambiataされた可能性が指摘できる。また、②の標記は「御御馬見屋」と、これは①の標記「元御馬見所」とは直接の関係がない。この敷地を外人屋と仮の文書を見出せない。

ところで、他の馬廐所の例を見ると、大名の邸宅や屋敷で馬場に面して馬廐を設けるものに準じた建物が名が見られ、馬場に面して細長い形状をしているものが多い***。仙台での図6、図7、図8の場合、国分町の通りが馬廐に相当する。仙台では毎月3～4月に大町と国分町が交差する芸術の都（図5）を中心に国分町と馬廐が問われた。その様子は日本各地の名産品に関わる生活、技術の様子を描いた『日本山海名所図会』（図9）にも見られる。また、盛岡や、盛岡では馬廐や馬廐の馬見の場所を大手柄に設けていたが、仙台では大手柄という大町、国分町の辺路がこの場所に相当しよう。

実際では誰が馬を見たかを具体的に示す史料は見出せないが、図6を仙台すば錄見が見た、あるいは、馬廐が関連のため馬を見た可能性を考えられる。しかし、仮に前者とした場合、馬廐の行動を詳細に記録している『治家記録』等に記載された事実を見出せない。一方、後者とした場合、「御御馬見屋」の写る問題から、馬廐所の機能が見失われると推測される時期は①を使えた元禄7年（1694）から②を使い始めた安永年間（1772～）初頭までの間と考えられ、この時期は元禄4年（1691）以降の馬廐廻系廻りを示す事例を「元禄7年（1721）以降の盛岡域における馬廐廻系廻りの時期的相違」と報告している。

馬廐所と馬廐所との直接結びつける史料は見出せないが、まず、馬}{}}
所で馬を見て親類の見所が記述は外に向か見所平面の部屋のお長屋門、見可を通る笹谷街泊した記録（『治家記録』元禄元年）と考えられる。盛岡藩の馬見所を示す川崎外人屋敷するものである。ここに示される3箇所の内、水澤（図1）は奥州街道の宿場であり、元禄7年以前に外人屋敷が2軒設けられていた*47、これが水澤を揮弁する伊達上野**48を払い下げられたと記されている。また、中新田（図1）の外人屋敷は、万治2年（1659）から延宝2年（1674）まで幕府から仙台藩へ派遣された目付*4のために万治2年に建てられた*49、これが元禄3年時点で中新田を揮弁していた真山氏に払い下げられたと記されている。川崎の場合は川崎を揮弁する砂金氏ではなく、貞享4年（1687）に、川崎の南東8キロにある栄田郡足立邑に在外を派遣した（文書7）本多伊賀（召出、1800年）に払い下げられ、状況が異なっている*50。

仙台藩下の大町外人屋敷を払い下げた原因の一つに幕府からの上使の派遣がなかったことが挙げられる*51、中新田の場合も目付の派遣が終了したことが理由と考えられるが、川崎においても馬見所の派遣が元禄3年（1690）を最後に停止された後に払い下げられていて、従って、外人屋敷の位置*52や他の施設との関係が明確でないものの、川崎外人屋敷が盛岡藩卒線と同様に馬見所の施設利用のために入れられたもので、仙台から派遣された藩士による施設もここで行われたのではないかと推測される。

9．結び
盛岡藩の御屋敷、仙台藩の外人屋敷、馬見所と関連して、馬見所、徳川御用人が宿泊に利用した施設、馬見行を示した場所・施設、およびこれら施設の建築について検討してきたが、その結果、以下の点が指摘できる。

（1）馬見所は卒線、盛岡の御屋敷を、徳川御用役人が遠野の御屋敷を宿泊に利用したとされる。元禄4年以降降伏されたことを考え付けると、その直後の元禄7年に払い下げられた川崎の外人屋敷も卒線の御屋敷同様に馬見所の宿泊利用に利用される。このように、御屋敷、外人屋敷と馬見所との隣接な関係がうかがえる。

（2）馬を実際に見て調度する場所は、彼岸の野老屋敷の大手筋、あるいは、それを前後を通して主要街道をと交差する位置付近に設けられる場合が多い。遠野ではその前後には設けられた御屋敷に続く町並に徳川御用役人が利用して馬見を行った。仙台では大手筋沿いの国分町に馬見所が設けられ、馬見所が利用したと推定される。

（3）仙台の馬見所は、御用街に広く開放される平面計画がなされ、街路に馬を導いてこれら施設から転じて調度するのに適していた点が特徴である。馬見所が面していた国分町に街道沿いの町並み、同じく国分町にあった外人屋敷に同様に、街路境界線に沿って前面の道路への開放度が高い長屋門を建て、町並と一体化した景観が形成されていたと推測される。

【謝辞】本稿をまとめるにあたり、史料・絵図に関して盛岡市中央公
民報、享石町教育委員会、上野善一、宮城県図書館の協力を得た。
付記して謝意を表したい。

文

1）藤野盛、藤野盛一、大田牧人「仏像台座の製作について」日本建築学会会報1971年3月号、pp.292、293、294、295。
2）大内吉久、藤野盛一「仏像台座の製作について」日本建築学会会報1971年3月号、pp.296、297、298、299。
3）近代的仏像台座の製作について、善山寺の伝承について日本建築学会1971年3月号、pp.300、301。
4）仏像台座製作の問題、昭和26年2月号日本建築学会1971年3月号、pp.302、303。
5）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.304、305。
6）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.306、307。
7）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.308、309。
8）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.310、311。
9）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.312、313。
10）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.314、315。
11）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.316、317。
12）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.318、319。
13）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.320、321。
14）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.322、323。
15）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.324、325。
16）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.326、327。
17）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.328、329。
18）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.330、331。
19）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.332、333。
20）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.334、335。
21）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.336、337。
22）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.338、339。
23）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.340、341。
24）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.342、343。
25）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.344、345。
26）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.346、347。
27）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.348、349。
28）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.350、351。
29）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.352、353。
30）「仏像台座製作の問題」日本建築学会会報1971年3月号、pp.354、355。

2020年6月10日受取、2020年10月30日採用決定

NII-Electronic Library Service